

第300回（9月）

会員共同検討会：経営新天地をこう切り開こう―激流変化を超える新しい力の発動―

現研所長 鈴木成裕

1960年代に「ロボットロジー」（共著）を執筆したことがある。まだ生産過程にロボットが十分な形で入っていなかった時代のことである。それからまもなくしてロボット業界が成立してくる。その当時、将来に向けて、日本のロボット開発者たちが見ていたロボットは生産をサポートするロボットである。

その流れに沿うロボットは進化を続けている。通産省のプロジェクトで企業が参加して開発したものでは、プラントの配管を手をつないで登っていき、腐食部分をチェックするような超マイクロ・ロボットが技術的には実用可能な段階まで来ている。

ところがアイボはどうか。人に可愛がってもらうためのロボット。人の愛情を集めるためのロボットである。これはロボット史の中では画期的な流れを創り出したと言える。アイボの出現以前にもうひとつそれに本格的に挑戦した事例がある。エプソンのつくった「ムッシュ君」である。2センチくらいの小さなロボットで、光で誘導される。

今、アイボの路線に向けて各社が一斉に研究を開始、ないし加速させている。そうになると日本人のもつ凝り性がどんどん発揮されてくる。やがてはロボットが各家庭に入っていく。そのあり方は、数年前から議論されていた情報家電というコンセプトを超えている。

今なぜこのような話を申し上げるか。日本の産業界に停滞感があるからである。その大きな理由の一つは、新しいモノはもうでないのでは、という諦念にある。だが、家庭の中に入り込んでいくロボットは、消費市場で確実に大きくなっていく。この愛玩用のロボット、介護用のロボット、搬送用のロボット等が、家庭の中で活躍する状態を日本の企業は創り出すことは可能なのである。

これから5年～15年先の成長産業として十分に成立するであろう。